
時浮橋 ときのうきはし

蒼山れい

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

時浮橋　　ときのうきはし

【Nコード】

N5789K

【作者名】

蒼山れい

【あらすじ】

『犬夜叉』二次創作短編集。犬夜叉一行＋殺生丸一行中心。本編終了後のエピソード多し。基本はラブコメ、糖度高め。戦いの終わった平穏と、ハッピーエンドの向こう側。【不定期更新】

しろい未来に綴るのは（前書き）

かごめと犬夜叉。最終回に寄せて。

犬夜叉×かごめ風味。

しろい未来に綴るのは

クラス、出席番号、氏名を書きこむ。そこまで滑らかに動いていたシャーペンシルの先が、ぴたりと止まった。

かごめはじつと白い紙面を見つめると、小さくため息をついた。

薄い紙に記されているのは、『進路希望調査票』の文字。

ペン先を空白欄に乗せたまま、かごめは机に頬杖をついた。

「進路……進路か」

コツコツとペン先で叩くと、紙に鉛筆の痕がうつすら残る。しかしそれは文字を形作るには至らず、かごめはもう一度ため息をこぼすと消しゴムをかけた。

高校生活も三年目を迎えれば、いよいよ本腰を入れて卒業後の進路について考えなければならぬ。進学か就職か。いずれにせよ、将来に対してなんらかの答えを出すには違いなかった。

中学校からの友人たちは皆、大学へ進むと言っていた。それなりに成績優秀なかごめも同じだろうと彼女たちは考えている。

しかしシャーペンシルを握るかごめの手は、それにふさわしい答えを書こうとしなかった。いや、何も書けずにいた。

「……思い浮かばない」

降参とばかりにシャーペンシルを転がしたかごめは、机に頬を寄せた。横たわった視線は、調査票の隅にプリントされた提出期限
明日の日付に引つかかった。

「どうしよう……」

何度同じ呟きをくり返しただろうか。呟きが積もるばかりで、現状は何も変わらなかった。

高校を卒業した、その先。かごめの目にはなんのビジョンも映らない。大学生の自分や社会人として働く自分を想像してみても、まるで他人事のように実感が湧かなかった。

その代わりに浮かぶのは、今ではもう懐かしいと思うようになって

てしまった姿。

「犬夜叉……」

彼の名前を口にただけで、胸の奥が苦しいほど痛む。かごめはぎゅっと目を瞑った。

四魂の玉が完全に消滅したことにより、遙かな戦国時代と現代を結んでいた骨食いの井戸は塞がってしまった。隔たれた時空はつながらぬまま二年が経つ。

まともに言葉を交わす間もなかった。一瞬絡んだ視線はすぐに断たれて、とっさに伸ばした手は何も掴めなかった。

あんまりだ、と思う。

すれ違い続けた想いが通じて、長い永い因縁と戦いに決着をつけて　それで終わりだなんて。

過酷な運命を強いておきながら、用済みになった途端目の前で引き裂くなんて。本当に、あんまりだ。

使命を果たしても、あの奇妙でかけがえのない日常が続いていくのだと、当たり前のように考えていた。

家族とともに暮らしながら、井戸をくぐれば犬夜叉や仲間たちの許へ行ける。大切なものを何ひとつ失わない幸福を夢見た。

だが、それは許されぬわがままだったのだろうか。

選ぶのはただひとつ。現代か戦国時代か。家族か　命を賭して恋した少年か。

闇から抜け出して家族の姿を目にした瞬間、隣の犬夜叉を忘れて母の胸に飛びこんだ。あのとき、自分の心は確かに家族の許にあった。

だから時空の扉は閉ざされてしまったのか？

「……わかんないよ」

どちらか一方なんて選べない。

目を開けたかごめは顔を上げると、白紙の調査票を見下ろした。シャーペンシルを手に取り、そして　。

たたもつと広げたスカートのポケットから、ひらりと何かが落ちた。

「ん？」

巫女装束の膝元から拾い上げたそれに、かごめは目を瞬かせた。

「これ……持ってきたんだ」

戦国時代にはそぐわない、未来の印刷技術を施された白い用紙は、さんざんため息をつかされた進路希望調査票だった。

いったん提出したものの、もう一度書き直すように言われて返されたのだ。いつまでも出せずにいたまま紛失してしまい、今頃こんなところから見つかるなんて。

空白欄に記入された『未定』のふた文字に、かごめは小さく笑った。

「おい、かごめ。いつまで支度してるんだよ？」

戸の向こうから苛立った口調の声がかかる。着替えのために外で待たせている人物を思い出し、かごめは返事をした。

「あー、ごめん。もういいわよ」

「つたく、これだから女は……」

ぶちぶち文句を垂らしながら部屋に入ってきた犬夜叉は、かごめの手にある紙切れに金色の瞳を眇めた。

「なんだそれ」

「スカートのポケットに入ってたのよ。進路希望調査票」

「しんろきばーちよーさひょー？」

「ほら、前に高校って説明したでしょ。そこを卒業したあと、どうしたいか調べる紙」

「ふうん……」

隣に腰を下ろした犬夜叉は、難しそうな顔で調査票を睨んだ。

「『未定』って書いてあるぞ」

「そのときは決まっていなかったからね。　　そうだ！　犬夜叉、何

か書くものある？」

「そこらへんに楓ババアの道具があるんじゃないか」

部屋の隅から筆を取ってくると、毛先に墨を含ませる。こみ上げ
てくる笑みを抑えながら、かごめは『未定』の横に新しい文字を書
き足した。

「でーきたっ」

「……なんて書いたんだ？」

かごめの手元を覗きこんだ犬夜叉は、眉間に皺を寄せた。

「えい……『永久就職』ってどういう意味だ？」

「んー、内緒」

「おい」

「いつか教えてあげるわよ」

だれよりもそばにいたいと望んだ恋人に微笑み返し、かごめは小
さく折りたたんだ紙を懷に忍ばせた。そこから幸せなぬくもりが沁
みこんでくるようで、彼女はそっと目を伏せた。

いつかこの言葉が本当になる日まで秘密にしていよう。自分たち
のことだから、そこへたどり着くまでに寄り道をしそうだけれど、
それすらも楽しみだ。意味を知った犬夜叉は、どんな顔をするのだ
ろうか。

思いを馳せるふたりの未来は、どこまでも続いていく。

CALLING YOU (前書き)

りんと殺生丸。少女の選ぶ、生きるべき世界。
殺生丸×りん風味。

CALLING YOU

あの人に名前を呼ばれることが好きだった。

頭を撫でられたり、抱き上げられたり、ましてや視線を合わせる
ことすら稀だった。あの人のまなざしはいつも遠くて、その心に自
分の存在は確かに映っているのか不安だった。

だから、不意打ちのように呼ばれる名前が、本当に嬉しかった。
そばにいてもいいのだと言ってももらえたような気がして。

名前を呼ばれる。そんな些細で当たり前の行為が、自分のすべて
を許してくれていた。

「りん」

影とともに空から落ちてきた低い声に、りんは顔を上げた。

「殺生丸さま……」

白い尾をたなびかせ、殺生丸がふわりと目の前に降り立った。あ
いかわらず重さを感じさせない身のこなしだ。

草地に座りこんだりんは、ぼかんと殺生丸を見上げた。静かとい
うよりも、凍りついた水面のような双眸が見下ろしてくる。

「何をしていた？」

温度を感じさせない声音は、いつもと同じことを訊いてきた。彼
がいなかった間に何か変わったことはないか。特になくても、りん
が笑顔で身の回りに起きた出来事を話し出す。

しかし、今日のふたりを包んだのは沈黙だった。どこかぼんやり
と見つめてくるばかりのりに、殺生丸は微かに眉をひそめた。

りんはのろのろと視線をさまよわせた。草の上には、摘んだばか
りの花が散らばっていた。

ああ、そつだ。

「……花を摘んでいました。珊瑚さんちの子どもたちに、持っていてあげようと思って……」

それから？

りんはぱちりと瞬くと、散らばった花をひとつひとつ拾いはじめた。赤い花、黄色の花、白い花。幼い子どもたちが大好きな、鮮やかな野の花。

再び降りた沈黙のなか、殺生丸はじつと花を拾うりんを見つめていた。その視線を感じて、りんは俯いたまま口を開いた。

「花を摘んでいたら、村の男の子がやってきて……手伝ってくれて、楓のところによく薬を貰いにやってくる少年だった。病気がちな母親に代わって幼い弟妹たちの面倒を見ながら、父親の仕事の手伝いもこなす、村でも評判のいい若者だ。年の頃も近く、楓の許で暮らしはじめてすぐに打ち解けた。」

お互いに気ままな子ども時代は終わって、そろそろ一人前の仕事を任される年齢だった。りんは先日、はじめてひとりで赤子を取り上げた。彼も父親から、「もう嫁をもらっても大丈夫だな」と言われたのだという。

「……それで、抱きしめられたんです」

おれの女房になつてくれないか？

後ろから回された腕は、思いがけずたくましかった。首筋に落ちたささやきには、抑えることさえ苦しそうな熱がこもっていた。

りんは拾い集めた花を両手で抱えた。抱き寄せられた拍子に落とすしてしまったのだ。

「ずっと好きだったって言われました。お嫁さんを貰うなら、あたしがいいって……」

まるで夢を見ている気分だった。心が羽のようになって、今もまだふわふわと落ち着かない。

花束に顔を寄せたりんは、そっと息をついて目を伏せた。

「びつくりしたけど、嬉しかったです。そんな風に言ってもらえて……でも」

花の陰で頬に熱がのぼっていく。睫毛の先に火が点りそうだった。
「嬉しかったけど……だれかのお嫁さんになるなら、あたし 殺
生丸さまがいいって、思ったんです」

走り出した心臓と一緒に、どこかへ逃げてしまいたかった。殺生
丸の瞳に映っている事実がたまらなく恥ずかしい。

深呼吸すると、花の香りが肺を満たした。面映ゆい答えを考えつ
いたあとのことを思い出し、りんの頭はすうつと冷めた。

「だけど、そう返事したら……急に怒り出して」

不意に突き飛ばされ、りんは尻餅をついた。驚いて振り返ると、
少年は信じられないものでも見たような顔をしていた。

あれは妖怪だ、と彼は怒鳴った。おまえのところに通ってきてる
のだって、いつかおまえを騙して食っちまうつもりなんだって、み
んな言ってる。

りんは言い返した。あの人は優しいよ。とても強い妖怪だけど、
同じくらい優しいって知ってるよ。

「おかしいって言われました。妖怪を好きだと考えるなんて、おか
しいって」

少年は青ざめた顔で走り去った。りんの言葉は届かなかった。
彼の背中を見送って、こみ上げてきたのは、さびしさとも悲しみ
ともつかない虚ろな思いだった。

りんはゆっくりと顔を上げた。再会した金の瞳にはやはり波ひと
つなく、ほっとしたようながっかりしたような気分になって小さく
笑った。

「殺生丸さまはとっても優しいのに……好きになったらおかしいな
んで、そのほうがおかしいですよね」

殺生丸はわずかに目を細め、どこか疲れた様子でため息をついた。
「……………おまえは本当に変わっている」

「え」

まさか殺生丸からも言われるとは思わず、りんは大きな目を更に
丸くした。

殺生丸は、茫然とする少女を片腕で軽々と抱き上げた。華奢とはいえ、昔に比べてずいぶん成長したはずなのに。そのまま、悠然とした足取りで歩き出す。

久しぶりに近づいた端麗な横顔に見とれていると、「りん」と名前をささやかれた。

「はい」

「おまえは私をおそれない」

「どうして怖がる必要があるんですか？」

「……だから変わっているというのだ」

殺生丸の声には呆れが滲んでいたが、それは決してりんを傷つけるものではなかった。りんはおずおずと片手を伸ばし、殺生丸の首に抱きついた。

花の香りに、懐かしさすら覚える殺生丸のにおいが混じる。降り積もったばかりの雪の白さに似た、清々しく涼やかな芳香。

名前ひとつでりんのすべてを許してくれるこの人を、どうして嫌うことができるだろう。

離れていても昔ほど不安にならないのは、離れているからこそ不器用な心が見えてくるからだ。疑うまでもなく、殺生丸はこうして会いにきてくれる。

「……りん」

長い爪を備えた指先が、ためらいがちに頬へ触れてくる。りんは殺生丸の首筋に頭を寄せたまま、その言葉を聞いた。

「私とともに来い」

来てくれるかと尋ねるのではなく、命令口調がとてもこの人らしいと思った。これが、りんの好きになった人なのだ。

今までも、これから、いつまでも。

りんは微笑んだ。

「はい、殺生丸さま」

少女の腕から溢れんばかりの花束は、彼女の喜びそのもののようにだった。

CALLING YOU おまけ：似た者兄弟？（前書き）

その頃の邪見と弟夫婦。

CALLING YOU おまけ：似た者兄弟？

「殺生丸様あ、どこへ行かれてしまったのですか？」

「あれ、邪見じゃない。こんなところで何してるの？ 殺生丸は？」

「むむつ、かごめと犬夜叉ではないか」

「またどうせ置いてけぼり食らったんだろ」

「そうなの？」

「うるさいうるさい、貴様らには関係なからう！」

「凶星なのね……」

「あいつだったら、どうせりんとかいうガキのどこだろ」

「そのりんがいないから探しとるんだ！」

「えっ、りんちゃんいないの？」

「いつものように巫女の許へ向かったところ、花を摘みにでかけたと
言われたんじゃ」

「だったら村のすぐ外じゃない？ 今の季節ならきれいな花がたくさん咲いてるし」

「りんのあとを村の若い男が追いかけていったと聞くや否や、殺生丸様はおひとりで翔んでゆかれてしまい……儂には、りんのおいをたどることのできる鼻なんぞないというのに！」

「……」

「……」

「あんまりです、殺生丸様！」

「……ねえ犬夜叉」

「なんだよ」

「あんたのお兄さんって、わかりにくそうで案外わかりやすいわよね」

「……放っとけ」

生まれいずる日に(前書き)

弥勒と珊瑚(+)。こんにちは、赤ちゃん。
弥勒×珊瑚風味。

生まれいずる日に

弾けるように響き渡った産声に、弥勒は思わず息を呑んだ。

「みつ、弥勒、弥勒、産まれたぞ。産まれおったぞ！」

動揺しているような笑っているような七宝の声に、弥勒は「ああ……」と間拔けな返事で応えた。こみ上げてくるどんな思いも言葉にならない。

妻の珊瑚が陣痛を訴えたのは、まだ空も白みきらぬ明け方のことだった。

珊瑚の呻く声に飛び起きてみれば、彼女は苦しそうな笑顔で「ごめん、法師様。もう産まれるみたい」とのたまった。急いで産婆でもある楓を呼んできた頃には、すでに破水に至っていた。

古来より、出産は女の戦いであり領分である。たとえ夫であろうと産屋に踏み入ることは許されず、駆けつけてくれた犬夜叉や七宝ともども外で待ち続けるしかなかった。

気がつくと、空は宵の瑠璃色に染まりかけていた。聞こえてくる妻の悲鳴に産屋へ駆けこみたくなる焦燥を堪えることに必死で、時間の流れなどすっかり忘れていた。

こんなにも長く苦しみ抜いて、珊瑚は新しい命をこの世に送り出してくれたのだ。外ほかでもない、自分の子を。

たまらず片手で口元を覆った弥勒の肩を、犬夜叉が小さく叩いた。父親となった友を見る金の双眸は、今ばかりはやわらかく微笑んでいた。

「こういうときは、『おめでとう』でいいんだよね？」

「……ああ」

弥勒はくしゃりと顔を歪めた。

「なっさけねえなあ。親父になったんだから、もうちょつとしゃきつとしろよ」

「しょうがないだろう……子どもが産まれたんだぞ。俺と、珊瑚の、

子が」

軽口を返すそばから目の奥が熱くなり、いよいよ弥勒は俯いた。肩の上までのぼってきた七宝が顔を覗きこんでくる。

「弥勒、わしからも言わせる。おめでとう、じゃ！」

心からの祝福に、弥勒は頷くことしかできなかった。本当に情けない限りだが、口を開けば嗚咽しかこぼれない。

どうしようもなく幸せで、今この瞬間がとてつもない奇跡のようだった。

奈落の呪いによって父を喪った日から、決して自分に流れる血を絶やしてはならないと思うようになった。

もしも奈落を滅ぼし、風穴の呪いを解くことが叶わなかったらたとえ死とすら呼びがたい消滅の運命を子に強いるのだとしても、自分の代で終わることなど許せなかった。

血脈そのものが呪いに喰われたときこそ、自分たちの負けなのだ。祖父の絶望、父の無念を、どうして忘れられるだろう。

受け継がれる復讐こそが、呪縛だった。

きつと自分ひとりですべてを背負いこんでいたら、幼い我が子に悲しみと憎悪だけを遺して消えていただろう。仲間たちと珊瑚と出会い、彼らがともに戦ってくれたからこそ、弥勒はこの途方もない幸福を手に入れることができた。

無垢な命に託すのは、もはや哀しい怨讐ではない。光に満ちた、まっさらな未来だ。

「ほら新米親父。いつまでも女々しく泣いてねえで、さつさと女房と赤ん坊の顔見てやれよ」

小突かれるように背を押され、弥勒は顔を上げた。元気な赤子の泣き声が、まだ見ぬ父を呼んでいるようだった。

男の子だろうか、女の子だろうか。どちらでもかまわない。小さなぬくもりをこの腕に抱いて、珊瑚によくやったと、ありがとうと伝えるのだ。

「まだ入るんじゃないよ！」

しかし弥勒の感動は、切羽詰まった楓の声に打ち破られた。

「……は？」

今まさに戸を開けようとしていた弥勒は、ぽかんと目を瞬いた。続くりんの声も、同様にひどく慌てふためいていた。

「駄目です、駄目なんです。まだ終わってないんですう！」
「いったい何が終わっていないのか。」

呆ける弥勒を、痛みに喘ぐ妻の叫びが再び殴った。

「さっ、珊瑚！？」

「だから入ってくるんじゃないと言っとならう！　まだお産は終わっていないんだよ！」

「ええっ！？」

赤子は無事に産まれたはずではないのか。弥勒ばかりでなく、犬夜叉と七宝も混乱の海に突き落とされた。

「ど、どうなつとるんじゃ！？　まさか、稚児やいが珊瑚の胎はらに戻ってしまったのか？」

「ンなわけあるか！　いっぺん出たモンがどうやって元に戻るんだよ！」

「ああああ、珊瑚っ、珊瑚　ッ！」

男たちはなす術すべなく、産屋の前で大いにうろたえるしかなかった。二度目の産声が彼らの耳に届くのは、月が夜空の高みに昇りきる頃だった。

気が遠くなるような痛みの末に産み落としたのは、ふたつの命だった。

「道理で大きいお腹だと思っただよ」

まさか双子だったとわねえと、楓は隻眼を細めて苦笑した。

「珊瑚さん。ふたりともかわいい女の子ですよ」

産湯を済ませた我が子をりんが差し出してくる。真っ白な産着に包まれたふたりの赤子は、鏡に映したようにそっくりだった。

床に伏せたまま、珊瑚は両腕で子どもたちをそっと抱いた。小さな赤い手を必死に伸ばしてくる様子を眺めているうち、目元にじわりと熱が滲む。

「よかった……」

「初産で双子なんて大したものだ。本当によくがんばったね」

優しい楓の声に喉が詰まる。珊瑚は泣き笑うように微笑んだ。

「ありがとう、ございました」

「わたしたちはおまえさんの手伝いをしてただけだよ。がんばったのはおまえさんと、この子たちだ」

りんが貰い泣きの涙を拭いながら、大きく頷いた。

「そうですよ。お産の一番の功労者は、いつだってお母さんと赤さまです。珊瑚さん、おめでとうございます」

「……ありがとう」

産みの苦しみに耐え抜いた心と体は疲れきっていたが、それすらも幸福に感じられた。あたたかな波にまどろみながら、珊瑚は何より訊きたかったことを尋ねた。

「法師様は……？」

「ああ、そうだね。りん、亭主殿を呼んできておくれ」

「はい」

とたとたと軽い足音のあとに、りんが夫を呼ぶ声がした。すると、ぶち破らんばかりの勢いで戸が開け放たれた。

「ささ、珊瑚は！？ 赤ん坊は、無事なのか？ 胎の中に逆戻りしてないか！？」

……どうやら、かなり気が動転しているらしい。

りんが笑いながら「珊瑚さんも赤さまたちも元気ですよ」と応え

ると、微妙な沈黙が落ちた。

「……たち？」

「はい、双子の女の子です。珊瑚さんに似て、とっても美人ですよ」
再び沈黙。やがて聞こえたのは、なんとも気が抜けるようなため息だった。

「ふ……ふたりか。そうか、双子か……」

珊瑚は視線をめぐらせた。弥勒は小屋の入り口にへたりこみ、ぐったりと頂垂うなだれている。

「一度産まれた子が母親の中に戻るなどあってたまるかい。まったく、情けない父御だねえ」

心底呆れたような楓の言に、弥勒はのろのろと顔を上げた。その表情は、やはり情けないとしか言い様がなかった。

「面目ない……」

「さあ、法師さま。早く赤さまの顔を見てあげてください」

りに促されてこちらへやってきた夫に、珊瑚は笑って問うた。

「そんなに心配だった？」

「あ、当たり前だろう。無事に産声が聞こえたと思ったら、まだ終わってないなんて聞かされて……寿命が縮んだ」

いつになく頼りない顔で呟き、弥勒はためらいがちに頬へ触れてきた。珊瑚の腕の中で眠るふたりの我が子を映した双眸が大きく揺れる。

「……あたしたちの子だよ」

弥勒のもう一方の手、かつて風穴が穿たれていた掌が、震えながら赤子の顔を包む。一度、二度と撫で、彼は「ああ」と声を洩らした。

「おまえと 俺の、子だ」

頷く言葉は、熱く、歓喜の涙に濡れていた。その口元が笑おうとして失敗している。

いつの間にか、小屋の中には自分たちだけがいた。楓とりんが気を利かせてくれたらしい。

「珊瑚」

頬に掌を添えたまま、弥勒が顔を寄せてきた。珊瑚の首筋に面をおもて伏せ、ありったけの想いが詰まった声で告げる。

「ありがとう」

珊瑚は目を閉じた。夫のぬくもりが触れ合う肌から沁みこんでくる。

「俺たちの子を産んでくれて。本当に、ありがとう」

生きていて、よかった。

この人を好きになってよかったと、珊瑚は心から思った。

かつての自分にとって、故郷を滅ぼし、たったひとりの弟を奪った奈落への憎しみだけが支えだった。まるで手負いの獣のように差しのべられた優しさを拒み、痛みを叫ぶ傷が癒えることをおそれていた。

そうしなければ、生きていけなかった。

だが、ひとりではないと教えてくれる友に出会った。寄りかかってもいい、泣いてもいいのだと、痛みを分かち合える仲間たちにくぐり会えた。

そして、恋をした。

はじめてだれかに寄り添いたいと、ともに生きたいと思った。叶わないかもしれぬ願いは、つらく、苦しかったけれど、あきらめなかったからこそ、自分たちは戦いを乗り越えて今にたどり着いた。守れなかった人々は二度と戻らず、傷が塞がっても痕は残るだろう。それでも、珊瑚はこれからも生きていく。

弥勒とともに。

「……こちらこそ」

顔を上げると、あたたかい涙が静かにこぼれ落ちた。弥勒のまなざしがこちらを向いて、まぶしそくに目を細める。

「あたしに家族をくれて……幸せをくれて、ありがとう」

弥勒は優しく彼女の涙を拭い、こつんと顔を合わせた。

「それも、お互い様だ」

瞳に浮かぶ同じ想いを確かめ合って、年若い父親と母親は、はにかむような微笑みを交わした。

それは、あるひとつの家族が生まれた日のことだった。

往復書簡（前書き）

草太とかごめ。海の向こうよりも遠いあなたへ。
犬夜叉×かごめ風味。

往復書簡

ねえちゃん、お元気ですか。

ぼくたちはみんな元気です。じいちゃんは最近、「階段ののぼり下りがつらくなった」とぼやいています。あいかわらず変なお守りを神社の人気商品にしようと意気込んでいます。

ママはこの頃、衛星放送の韓流ドラマをチェックするようになりました。今まで見向きもなかったのに、実はお気に入りの俳優ができたようです。そのうち、DVDを買いそうですね。

ブヨはあいかわらず、日がなごろごろしています。ねえちゃんがいなくなつてからは、ぼくの部屋に入り浸るようになりました。ブヨはブヨなりにさびしいのかな、と思います。

ぼくはこの間、中学に入つてはじめての中間テストを受けました。手応えは……正直、あまりよくありません。ママがにこにこしながらお説教をはじめた姿が目につくようで、今から戦々恐々としています。ねえちゃんが必死に机にかじりついていた大変さが、ようやくわかりました。

中学に上がつてから、よく「ねえちゃんを紹介してよ」と言われます。もう嫁にいったんだと説明すると、「ねえちゃんはヤンキーなのか？」と訊かれます。犬のにいちやんがうちに来ていた頃に流れた、「ねえちゃんのカレシは筋金入りのヤンキーだ」という噂が今頃になつて信憑性を増してしまつたようです。そのうち、ねえちゃんはレディースで総長を張っていたんだと言われそうで、どうしようか悩んでいます。

ねえちゃんは、戦国時代でどんな暮らしをしているんですか？犬のにいちやんと喧嘩していませんか？せつかく一緒にいられるようになつたんだから、仲良くしなきゃ駄目だよ。

ねえちゃん。

本当に、元気だよね？

草太。

ママ。おじいちゃん。それからブヨ。

お元気ですか？

わたしは元気です。怪我也病気も、今のところ何ひとつしていません。

先日、楓おばあちゃんの手伝いとして、はじめてお産に立ち会いました。この時代のお産は、本当に命懸けです。わたしが立ち会わせてもらったお母さんは、もう何人もお子さんを産んだベテランの経験者だったんだけれど、それでも戦場のようでした。わたしは何をしているのかぜんぜんわからなくて、楓おばあちゃんやりんちゃんの言うとおりにすることで精いっぱいでした。無事に赤ちゃんの泣き声が聞こえたときには、情けなく泣いてしまいました。

楓おばあちゃんたちは、これから少しずつ勉強していけばいいと励ましてくれたけれど、ちょっと自信をなくしてしまったのが本音です。薬草を煎じたり、お祓いをしたりするよりもずっと難しく、本当にこっちでやっていけるのか不安になってしまいました。

犬夜叉には、「さんざん今まで妖怪と戦ってきたくせに何言ってるんだ」と鼻で笑われました。自分も珊瑚ちゃんの初産のときには弥勒様と一緒に頑張ってうろたえていたくせに、失礼なやつです。正直、妖怪と戦うよりもお産のほうがよっぽどおそろしい気がします。

でも、本当はわかってるんです。

だれだって最初は怖くて、少しずつ積み重ねていくことで、それ

を克服するんだということ。はじめはまともに弓を引くこともできなかったわたしが、今では空を飛んで逃げようとする妖怪を射落とせられるように。少しずつ少しずつ、確かなものをこの手で作っていくんだと。

きつと犬夜叉は、そう言いたかったんだと思います。実は、あのあと喧嘩になってしまって、まだ仲直りしていません。わたしから謝るのはなんだか癪に障るけれど、少しずつ素直になっていくと思います。だって、一緒にいられるんですから。

わたしは、幸せです。

みんなに会えないことはさびしくて、みんなのことを思い出して泣きそうになることもあるけれど、毎日笑って元気に過ごしています。だから安心してください。

願わくは、みんなもそうでありますように。

この手紙が未来に届くかどうかかわからないけれど、届くと信じて、これからも井戸の向こうに送り続けたいと思います。

それでは、また。

ねえちゃんからの返事が来ないかと、ときどき井戸を覗きこみます。

ねえちゃんが嫁にいった日、井戸の向こうには青い空が見えました。もう一度あの空が見えないか、そしてひよっこりねえちゃんが顔を覗かせたりしないかと思わずにはいられません。

いつか、ねえちゃんが犬のにちゃんと一緒に里帰りする日まで、手紙を出し続けたいと思います。そのときには、かわいい甥っ子が

姪っ子に会えることを期待しています。

それでは、犬のにちゃんによろしくお伝えください。

追伸。

どうか、ふたりが元気でいますように。

FALLING YOU (前書き)

殺生丸とりん。プロポーズ攻防戦。

『CALLING YOU』その後。糖度高め。

FALLING YOU

己を失墜させるものがこの世にあるなどと、殺生丸は思いもしなかった。

孤高という言葉を書きで描くとしたら、まさしく彼がそうであった。捕らわれることも屈することも知らず、何人なんびとの手も届かぬ遙かな高みに行く男。だれもが、そして殺生丸自身が、その在り方を疑いもしなかった。

そのはず、だった。

「……りん」

困惑をわずかな間に滲ませ、殺生丸は目の前の娘の名を呼んだ。常であれば、それこそ花のような笑顔を咲かせ、「はい、殺生丸さま」と嬉しそうに声を弾ませて応えるというのに。敢えなく突き返されたのは、実に居心地の悪い沈黙だった。

殺生丸と膝を向かい合わせたりんは、しかし視線を彼に向けることなく横へ逸らしていた。この頃、頓とみに娘らしさが増してきた横顔はむっつりと押し黙っている。皺深く寄せられた眉根が、彼女の不機嫌ぶりを物語っているようだった。

片膝を立て、脇息に頬杖をついた殺生丸は、継ぐべき言葉を見出だせずにいた。鉄面皮も青ざめる能面ぶりを誇る彼だが、今ばかりは薄い金の双眸を頼りなく揺らしていた。それでも、息子の心根を憎たらしいほど見透かしている実母ぐらいにしか気づけぬ程度だったが。

結局、再び殺生丸が口にしたのは、情けなくも直球の問いだった。「いったい何が不満なのだ」

異母弟の縁へと、考えるとなんとも気に入らぬことだが、で知り合った老巫女に預けていたりんが殺生丸の許へ戻ってきて、もうすぐひと月が経つ。数年越しのりんの帰還を素直に喜んだのは阿吽で、従者の邪見は昔のようにぶちぶちと文句を垂らしていた。しかし、

なんだかんだ言いながらもかいがいしくりんの世話を焼く様子は、まるで嫁へ出した娘の里帰りに浮かれる父親のようだった。

りんも心から幸せそうな表情を見せていたが、いつからか殺生丸に対する態度が強張りはじめた。三日前にはすっかり硬化し、もはや棘が生えかける始末である。

邪見や阿吽に対しては、まったく変わりないのだ。殺生丸にだけ笑みを見せず、口を閉ざし、振り向こうともしない。

ふたりの在り方は、不動の殺生丸に対してりんのほうから行動を起こす、というのが基本だ。だから今回も殺生丸は腰を上げず、自然にりんの機嫌が直ることを待つことにしたのだが　　どうやら、時が解決することも難しいようだった。

小心者の邪見は何も言わないが、かなりやきもきしていることは鬱陶しいほど訴えかけてくる視線から察せられた。とうとう根負けしたがゆえに、こうしてりんを呼びつけたのだ。

しかし、よくよく考えてみると、りんが自分にそっぽを向くなどという事態はこれがはじめてだった。どうすれば彼女の瞳を取り戻せるのかわからず、殺生丸は途方に暮れるしかなかった。

「不満があるならば、申してみよ」

りんが何かに怒っていることはわかる。だが、その『何か』がわからない。

「りん」

語気を強めてもう一度呼びかけると、りんは微かに睫毛を震わせた。きゅつと噛みしめられた唇が殺生丸に向き直りたい衝動を堪えている証のような気がするの、都合のいい自惚れだろうか。

出会った頃は、己の腰にも満たぬ童女だった。親兄弟と声を失い、村人に冷遇されても、殺生丸に見せる笑みはいつでも澄んでいた。言葉を取り戻してからには雀のごとくさえずり、抱き上げれば鞠のように笑い声を弾ませた。小さな体からは、いつも日向のにおいがした。

だが、青い蕾がいつかやわらかく綻ぶように、人の娘にも花開く

時がやってくる。殺生丸の前にいるりんは、もはや子どもではなかった。

背丈が伸び、体つきは幼子のものとは異なるまろみを帯びはじめていた。癖のある髪に櫛を通すことを覚え、きちんと束ねられた毛先は背の半ばを過ぎている。何より　いつからこんな物憂げな顔をするようになったのだろうか。

おそろしさにも似た思いを噛みしめ、殺生丸は脇息から身を起こした。

手を伸ばしてりんの頬に触れる。見開かれる黒い瞳に、彼は言った。

「私を見る、りん」

それは懇願だった。

殺生丸に関しておそろしく聡いりんは、気づいたのだろう。ひどくびっくりした顔で、おそろおそろ彼を振り返った。

殺生丸はすかさずりんの両頬を包みこみ、そのまなざしを捕らえた。

「私は、不満があるならば申せと言った。黙れなどとは言っていない」

ぬばたまの双眸を覗きこむと、りんの表情がくしゃりと歪んだ。それがあまりにも儚くて、殺生丸は息を呑む。

「だって……」

昔よりも低く落ち着いて、だが鈴の音のように軽やかなはずの声は、震えていた。

「殺生丸さま、なんにもしないんだもん」

ただ、その言葉遣いだけはどこか舌つ足らずで、ひどく甘い。

「あたし……あたし、殺生丸のお嫁さんになれるんだって思ってた。一緒に来いって言うてくれたの、そういう意味だって」

でも、とりんは喘ぐように続けた。

「殺生丸さま、昔とおんなじだった。なんにも変わってなかった。じゃあ、どうしてあたしに来いって言ったんですか？　人間か妖怪

かを選べって、そういう意味じゃなかったんですか？」

りんの目が潤み、今にも溢れそうに涙を湛える。小さな拳が弱々しく殺生丸の胸を叩いた。

「あたしは選んだんです。妖怪の世界を、殺生丸さまと生きるって選んだんです。じゃあ、殺生丸さまにとって、あたしはなんなんですか？」

殺生丸は、答えなかった。

言葉では。

「……っ!？」

ぐつと距離を詰め、彼は驚きを叫ぶような呼吸ごとりんの唇を塞いだ。

はじめて触れる少女の口唇はとろけるように熱く、やわらかかった。甘露のような味わいを夢中になって貪る。

細い腰を抱き寄せると、荒波に投げ出された者のようにすがりついてくる。息を吹きこむような接吻をくり返すうちに、腕の中の体から力が抜けていった。

口づけから解放した途端、りんはぐつたりと崩れ落ちた。紅潮した耳元に、殺生丸は唇を寄せる。

「……ともに来いと言ったのは、こういうつもりだが？」

隠しようもない熱のこもったささやきに、りんの顔がいつそう赤らんだ。あまりの不意打ちに言葉も出ないらしく、猫に似た目を忙しなく瞬かせている。

殺生丸は姿勢を直すと、組んだ膝の上にもりんを乗せた。女らしさを増しつつあるとはいえ、未だ華奢な肢体を袖の内に閉じこめる。

「おまえはもう子どもではない」

生来の気質を表すように元気よくあちこち跳ねた癖つ毛を指で梳きながら、殺生丸はいつになくゆるやかな口調で語りかけた。

「だが、まだ女になりきっていない。私はおまえがそうであるうちに、おまえを妻にする気はない」

「……どうしてですか？」

堅い胸に頬を寄せたりんは、悲しげに尋ねた。殺生丸は彼女を抱く腕に力をこめた。

「物事には相応の時期がある。花を手折るには、蕾が咲ききるまで待たねばならぬ。おまえは、ようやく咲き綻んだ蕾のようなものだ」だから、まだそのときではない。

本音をいえば、殺生丸とて憂鬱なため息をつきたくて仕方なかった。ようやく望んだ形でりんを迎えたというのに、真の意味で手に行けるのは当分先のことである。まさに生殺しだ。

だが事を急いではまえば、傷つくのはりんなのだ。いとおしむべき存在を壊してしまつては本末転倒である。

待ち焦がれていたのは何も自分だけではないと知って、殺生丸は安堵する一方で開き直つてもいた。待たねばならないのなら、待つことを楽しめばいい。

甘く色づき、咲き初める蕾には、それにふさわしい愛で方があるう。

「おまえが花を咲かすまで、私は待つ。おまえはここで、私の腕の中で、私のために咲けばいい」

ふつくらとした下唇を親指の腹でなぞると、りんの表情がまた崩れた。しかしそこに曇りはなく、家にたどり着いた迷子が見せるような泣き顔だった。

「あたしを、お嫁さんにしてくれるんですか？」

「なぜ私がおまえに虚言を吐く必要がある」

りんは涙をこぼしながら笑った。ようやく目にするこの叶った笑みは透きとおるように美しく、陽光のようにあたたかく殺生丸の胸に射しこんだ。

少女の頬を濡らす雫を唇で吸い取りながら、殺生丸は言った。

「私とともに在れ、りん」

「はい、殺生丸さま……！」

りんは力いっぱい頷くと、殺生丸の首に腕を回した。太陽の香りを纏った黒髪に頬を埋め、殺生丸は目を伏せた。

かつて、彼は孤高と謳われた。だがどうだ、天の高みに行く強大な妖怪を、か弱いはずの人の娘があっさりと地に叩き落とした。

ぬくもりを教え、慈しみを教え、果てにはだれかとともに生を歩むことすら教えようとしている。

なんとおそろしく、愛しきことか。

かつて嘲笑った父の二の舞なるのだと思うと、素直になれぬ部分があるのも確かだった。腑抜けと蔑んだ異母弟の同類になってもよいのか、とも。だが、ひとたびりんの笑顔を目にすれば、そんなひねくれた矜持はいともたやすく片づけられてしまうのだ。

きつと生涯、未来の妻に敵うことはないのだろつと確信しながら、殺生丸は心地よい敗北感にゆっくりと微笑んだ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5789k/>

時浮橋 ときのうきはし

2011年4月3日14時56分発行